# TRACK 7

## The First Noel

Noel Noel Noel Noel .....

# Track.7 The First Noel

協会・パリ支部。

「ん？これは……」

アンダーソン・カイルは思わず疑念を示した。

彼が手にしている資料は、先日日本で起こった急進派の襲来を受けての、事後処理を伴う資料だ。金色の魔女の助けもあり甚大な被害には及ばなかったものの、人々が日常生活を過ごすには些か不信感を抱かせる惨状になってしまった。それ故、要は被害に対する偽証とでも言うのか、人々がそれなりに十分な納得ができるようにしなければいけないのである。

「ふう……」

アンダーソンは午前中からずっと細かな字と向き合っていた。そろそろ身体の限界が来たのだろう、彼は手元の資料を「とりあえず置いておく用」と称した後ろのスペースへと置いた。既に部屋中にはたくさんの資料が床を埋め尽くしており、どこまでが必要なものでどこまでが不必要なものなのか、彼以外には認識できない散らかり様である。

アンダーソンは目頭を押さえると、次の資料を手に取った。

「……これもetcの文書についてか」

事後処理及び事後報告とも言える資料。そのほとんどがetcの文書とing――鈴木聡太に関する内容だ。

「存在するという確証がないにも関わらず……よくここまでやれるもんだ」

アンダーソンは再び大きなため息を零すと、凝り固まった身体を解すように大きく伸びをした。その瞬間だった。扉を小さく叩く音がした。

「どうぞ」

律儀に彼の返事を聞き終えてから、扉を開ける女性。先日、彼の秘書を務める事になったマーガレットだ。

「……何度言えばいいのでしょう。片づけるという言葉をご存知ではないのですか」
淡々と、呆れを通り越した苦言。アンダーソンは慣れているのか、何てことない調子で応対した。
「片づけようとは思っているよ。けど、片付けたら片付けたでどこにしまったか忘れてしまうんだ」
マーガレットは何も言わずに彼を見つめた。おそらくその瞳には何の感情も抱いていないのだろう。
「それで？何かあったのか？」
無言の圧力から逃れるようにアンダーソンは彼女へ問いかけた。
「呼び出しです」
「……なるほど」
「つい先日も呼び出しを頂いていた様ですが、何か問題でも起こしたのですか？」

「いいや。そもそも俺が何かやらかしていたら、既にここに席はないさ」
そう返事をすると、アンダーソンはやれやれと言った様子で立ちあがった。そして再び大きく身体をのけ反るとゆっくりと扉の方へ向かう。ふと、彼はマーガレットとすれ違い様、その小さな肩に手を置いた。
「俺の机の掃除、頼んだよ」
そう言ってアンダーソンは、上役が待つ会議室へと足を進めたのだ。

＊＊＊

アンダーソンが会議室に入ると、そこには以前と変わりない顔ぶれの男たち。そして大きなモニターがあった。彼が所定の位置につくや否や、モニター上の男は静かに口を開き、
『金色の魔女の家にいる改造人間をここに連れてこい』

「え？」

アンダーソンは思わず聞き返すが、返ってくる声はない。どうやら彼の聞き間違いではなさそうだ。

「えっと……何故でしょうか」

当然の疑問だ。この問いに関しては上層部も既に用意はしていたのだろう。寸分の間もなく、男はその答えを述べた。

『研究所の中で最も危険な研究は何か。それは人間と同じ生命体を作りだすことだ。彼らは倫理を無視して改造人間を作りだした。その改造人間が研究所という組織から離脱したという噂を先日耳にした』

「……質問の答えにはなっていません。俺はその改造人間を連れてくる理由を尋ねたのですが」

『これ以上、君に話すことはない』

再び口を閉ざした男に対し、アンダーソンはやや苛立たし気に話を進めた。

「その改造人間を連れて来たとして、金色の魔女が黙っていないと思いますが」
『マエストロがどう動くは分からない。だが、彼女は先日の日本支部での一件でこちらに貸しができている』
「……つまり先日の件の謝礼を要求するということですか」
『好きに捉えて構わん。用件はそれだけだ』
「……はい。お疲れさまでした」
ぎこちない動作でモニターに向かい、頭を下げるアンダーソン。会議は終わったようだ。
『そういえば』
ふと、男の口が開いた。その声にアンダーソンは思わず顔を上げる。
『君のお父上はご健在かな』
「……ええ、おかげさまで」
『そうか』

その言葉を最後に、ふっとモニターの電源が落ちた。後に映るのは真っ黒な画面だけだ。
傍に控えていたパリ支部の連中も続々と部屋を後にしていく。
アンダーソンは彼らが全ていなくなると、一番最後に会議室を後にした。そして真っすぐと先ほどの自室へ足を向ける。

＊＊＊

「お、随分と綺麗になったな」
アンダーソンが自室に戻ると、そこは彼が出て行く前と同じ部屋だとは思えないほど見違えていた。
「……もう散らかさないでくださいね」
秘書の小言をさらりと交わし、アンダーソンは彼女へと振り返った。

「そっちの結果は？」
彼女は迷うことなく、上着のポケットから小さな機械を取り出した。盗聴器だ。
「無事に終えました」
「そうか、ありがとな」
そう言ってアンダーソンは彼女の掌からそれを受け取った。
「今後、こういう事は控えさせていただきます。バレたら私も只じゃ済まないので」
言いながら彼女はもう片方のポケットから小さな紙を取り出した。それはアンダーソンがこの部屋を後にした後、彼女が机の上で見つけたものであり、そこには「盗聴してほしい」との一文が書かれていた。
マーガレットは、近くのライターを手に取ると慣れた手つきで、その紙きれを燃やす。後に残るのは、灰皿の上の炭だけだ。
「さてと。せっかく君が机の上を綺麗にしてくれたようだけど、俺はそこに座れないね」

秘書が訝しげに眉を潜めると、アンダーソンは惜しむように机にそっと手を置いた。
「お出かけですか？」
「ああ、日本までね」
「……そうですか。それでは当分、この部屋を使用する方はいらっしゃいませんね」
マーガレットはざっと室内を見回して呟いた。そんな彼女の傍でアンダーソンは身支度を整え、馴染みのソフト帽をかぶった。
「それじゃ。お土産、楽しみにしていていいよ」
「お気をつけて」
堅苦しく頭を下げる彼女を横目に、アンダーソンはそっと自室を後にする。
アンダーソン・カイル、海外出張のはじまりだ。
＊＊＊

鳴り響くアナウンスにガタガタと重たい音を立てて歩く人々。

「……やかましいな」

空港内に響く雑音にやや顔を顰めるも、彼はそこまでその雑音を気にしてはいなかった。それ以上の問題が、彼の心中には漂っている。

今回与えられた仕事に対する協会の思惑だ。更に、改造人間と雖も彼らには感情というものが宿っている。その子供を無理やり連れてくる事が果たして自分に出来るのだろうか。彼女の行く末はきっと、人体実験しか待っていないだろう。

「――それでも俺は、」

気の進まない仕事にアンダーソンは深いため息を零した。

「いや、まだ考える時間はある」

＊＊＊

「ねえねえ、なにしてるの？」

「あっちであそぼう」

舌っ足らずな声が飛び交う室内。数人の園児の中心には一際背が高い少女が仏頂面で佇んでいた。

「ねえねえ」

「……うるさい」

「あそぼーよ」

「うるさい!!私に話しかけるな!!」

怒号をあげる少女。しかし園児たちはそれに怯むことなく、なおも金髪であり外国人であり、明らかに彼らにとって異質であるその少女に声をかけ続けていた。

「あそぼーよ」
「きいろー」
外見から付けられた安直なあだ名に少女――ノエルは一気に顔を赤らめた。
「……その呼び方やめろ!!」
「いいじゃん、きいろー」
「きいろ、きいろ」
ノエルが注意すると、それに反応するように他の園児達も「きいろ」というあだ名を連呼し始めた。そう、彼女の反応はまさに理想的だ。何を言われても無視をすればいいものを、ご丁寧に彼女は一つ一つ受けとめて反応していく。まさにからかいやすい対象そのものだった。
しばらくの間、小規模な小競り合いを見届けると、天城紫乃はやっとこの幼稚園の先生らしく彼らの間に割って入っていった。
「ほらほら、みんな。まだお昼休みじゃないわよ」

彼女の言う通り、今は授業中であった。ピアノを用いたダンスを行う時間であり、モデルとしてノエルは園児たちの前に出ていたのだ。しかし彼女はすぐに嘲笑の的になったのだが。

「はい、じゃあもう一回。ノエルに合わせてね」

そう言うと、天城は再びピアノに向き直った。そして軽やかに腱盤の上で指を躍らせる。室内に心地よいメロディーが響き渡った。それに合わせて園児たちも身体を動かす。平和そのものの光景だった。

二、三回ほど曲が流れた頃だろうか、遠くの方で小学校のチャイムが聞こえた。昼のチャイムだ。天城の幼稚園もこのチャイムを昼休みの合図としていた。そのため、園児たちはこの音が聞こえる否やすぐに授業が終了したと決め、あちらこちらへと視線を向ける。天城はやれやれと言った様子でピアノを弾いていた手を止めた。

「はーい。じゃあお昼休みにします」

先生の許しも得たということで、園児たちも次々と散っていき、各々好きに話し始める。あっという間に室内は園児たちの話し声で埋まっていた。ノエルもやっと自身の仕事を終え、深いため息をつく。しかし、その安らぎは一瞬で過ぎ去っていった。

「きいろー」
「なんで髪の毛そんなに〝きいろ〟なんだよ」
園児たちの興味は依然として彼女に向いていた。
「せんせい、なんでリズム先生は髪の毛、〝きいろ〟なの？」
「リ、リズム……!?」
「ふむ。それはね、外国人だからだよ」
天城はノエルの当惑もそっちのけで優しく園児に答える。
「外国人!」
「日本語わかるんだ、すげー」
「リズム先生、何か日本語はなして」
先ほど以上に目を輝かして群がってくる園児たち。ノエルは徐々に顔を赤らめながら、彼らに追い詰められていく。

「リズム先生―」
「何かしゃべってよ」
「う……うるさいっっ!!」
ノエルは恥かしがるように、天城の背後へと逃げ込んだ。そんな様子を見て天城も、そろそろ昼飯の準備に取り掛かるよう園児に促す。
「当番の人、前に出てきて挨拶おねがいしまーす。えっと……今日は恵梨香と沓子と直人と……」
「……孝太郎と祐介」
天城が言葉に詰まっていると、すかさずノエルが小さく助言した。
「あら、覚えてたの」
「そこのホワイトボードに描いてある」
「そういえば、そうだったわね」

惚けたように笑う天城。
そんな彼女を置いて、ノエルは教務室へと向かった。自身の昼飯を確保するためだ。

「……何で私がこんなことを」
ぶつぶつと文句を呟きながら、冷蔵庫を漁っていると後ろからずいっと手が伸びてきた。
「それは君が学校に行っていないからよ」
彼女が振り向くと、天城は馴染みの炭酸飲料を手に立っていた。
「学校に行っていないのは別に関係ないだろう」
「あります。あなたは居候だし、学校も行かずに暇してそうだから。なら居候として家主の仕事を手伝うのは道理でしょ？」
「うう……」
非の打ちどころもないド正論にノエルは何も言い返す事が出来なかった。

＊＊＊

「あー、お腹空いた」

職員室。天城は身体をよろめかせながら、園長として決められた席に腰を落とした。

「あら、園長先生。お昼はまだなんですか？」

「何食べようか、考え中で」

「それじゃあ、ノエルちゃんもまだ食べてないんですか？」

天城の斜め前の席に座る宮下は、心配そうな声音で首を傾げた。

「そうだけど……まあ、お腹空いてたら自分で何か食べるだろうから大丈夫、大丈夫」

「そうだといいですけど」

宮下はなおも不安げな様子で天城の方を見る。すると、唐突に職員室の扉が開いた。
「あら、園長先生。何ですか、その姿勢は」
入ってきたのは丸山だ。彼女は天城が机にだらりと座っているのを見て、眉間のしわを一気に寄せた。
「ん？なんだ、丸山先生か」
「何だじゃありません。そのような態度、園児たちが見たら教育に悪いです。それとその口調ももう少し正してください」
「はいはい」
まるで小姑のように小言を言う彼女を、天城はいつも通りの調子で聞き流す。彼女も彼女で天城のこのような態度には慣れたのだろう。丸山は自身の席へと向かった。
すると、今まで会話が終わるのを待っていたのか、宮下の隣に座る松村がぐいっと顔を前に出してきた。
「あの、前から聞きたかったんですけど。園長先生とノエルちゃんってどういう関係なん

ですか？」

好奇心旺盛な彼女はきらきらと輝いたような瞳で天城へと問いかけた。その質問に天城は、少し考えるような仕草を見せると、

「そうね……何て言えばいいのかしら。保護者は保護者だけど……遠い遠い親戚みたいな感じかしら？」

「……それはもう他人なのでは」

松村の冷静な突っ込みを笑顔で流すと、天城は大きく伸びをした。

「さてと。お昼ごはん、食べてくるかー」

＊＊＊

――ピンポン。

それは急な来客だった。玄関に近い丸山が応対に出ると、そこには大柄の外国人男性が立っていた。

「え、えっと……は、はろー？」

彼女は突然の外国人の訪問に戸惑い、まともな英語が出てこなかった。そんな彼女の応対を外国人の男は人当たりのよい笑顔で受け取ると、流暢な日本語を口にした。

「園長先生はいらっしゃいますか？」

「え、園長ですか？はい!!います!!少々おまちください!!」

慌ただしい足取りで奥に引っ込む丸山。しばらくして、教務室からカップ麺片手に園長が顔を出した。

「つたく、こっちはまだ食事中だっていうのに……大体、来客の予定は……」

「こんにちは、マエストロ」

天城は男の顔を見た瞬間、露骨に嫌な表情を浮かべた。

「まあまあ、そんな顔しないでください。私もここまで来るのに苦労したんですから」
「何か用？」
「協会の特使として。金色の魔女にお伝えする事があります」
「そう……それじゃあ、応接室で話を聞くわ」
天城は真剣な声音でそう告げた。そしてすぐに背を向けて彼を案内する。協会からの特使――アンダーソン・カイルも静かにその後をついていった。

＊＊＊

応接室。天城とアンダーソンは何も言わずに向き合っていた。彼らのほかには誰もいない。
「ええと……他のみんなは元気ですか？」
いきなり例の話題について話すのは気が進まなかった。アンダーソンは申し訳程度の世間

話をしてからと思ったが、魔女の気はそこまで長くないようだ。
「アンダーソン・カイルくん。君はそんな話をするために来たわけではないでしょ？用件を手短に話して」
アンダーソンは彼女の言葉に対し、思わず押し黙ってしまった。事実、彼の内心の整理は未だ終わっていなかったのだ。
「あなたほどの人が来るってことは、それなりに大事な件なんでしょ？さっさと話してちようだい」
天城に促され、ついにアンダーソンも決心した。そして、言葉を選ぶようにしてゆっくりと口を開く。
「……改造人間についてです」
「へえ」
「……協会からこちらにいる改造人間を連れて来いという命を受けました」
「なるほどね」

そういうと天城は立ちあがり、別の部屋へと向かった。数分足らずで彼女は再び応接室に戻ってきたが、その手には数枚の書類が握られている。

「既に公文書は来てるわ。あとメールでも」

「え……」

アンダーソンはその件については初耳だった。

「あなたが来る前にそういう宣告は受けていた。改造人間を連れてこいってね。先日のロベルトの件の貸しを返せって。まあ、私が逆の立場でも何かしら要求はするわね」

天城は書類をひらひらとさせながら、何てことないように話していた。その様子を見て、アンダーソンは慎重に口を開く。

「……どうなさるおつもりですか？」

「どうするもなにも……別に？」

「いや、ですが……ここで協会の要求を断ると今後の関係性にも影響が出るかと。研究所の勢力が弱い中、協会が勢いを増していくとなると、あなた自身の立場も悪くなるのでは。

それならば――」

「それならば？その続きは？」

天城の視線に思わず、アンダーソンは口を閉ざしてしまった。そして勢いの削がれた彼は首を落としたまま、再び口を開く。

「……その、改造人間を見てみたいのですが」

天城は一瞬驚いた顔をしたが、二つ返事で彼女はそれを受け入れた。そして、廊下に向かって改造人間の少女の名前を呼んだ。少女はすぐに顔を出した。口元にはつい先ほどまで食事をしていたのだろうか、茶色いソースがついている。そんな子供らしい、あまりにも人間の子供らしいその風貌にアンダーソンは戸惑いを隠せなかった。

「ほら、ノエル。挨拶して」

天城に促され、ノエルは小さくお辞儀をすると、さっと彼女の背中に隠れてしまった。

「何だ、お前。人見知りしてるのか」

「だ、誰が……!!してない!!」

顔を真っ赤にして怒る少女。アンダーソンには、やはり普通の子供にしか見えなかった。
「……協会は、このような子を……」
消え入るような声で呟くアンダーソン。天城はそれを聞き逃すことはなかった。
「あら、全部承知でここに来たんじゃなかったの」
「いや……そうだが、こんなだとは」
ずっと視線を落としている彼をノエルは天城の体越しに見ていた。すると数分の後、やっとアンダーソンがきつく拳を握りしめ、決意めいた顔を上げた。
「……協会が改造人間を連れてこいといった指示には、研究所の力を利用し、より多くの研究を進めて行くためです」
「たとえば？」
「……現状を維持するための力を」
「他には？」

「……それは……詳しくは……」
無言で見つめ合うアンダーソンと天城。その間の空気は決して穏やかではなさそうである。ノエルはその空気に当惑しながらも、今の彼らの会話の中で気になる言葉があった。
「いま……改造人間って言った？連れてこいってどういうこと」
「このおじさんが、あなたを協会に連れてこいって指示を受けたんだって」
平然と言ってのける天城。だが、ノエルの顔は一気に色を失っていった。そして彼女は天城の服をぎゅっと握りしめ、恐怖の入り混じった目でアンダーソンを見据える。
顔を上げずとも、アンダーソンには彼女の視線が自分に注がれているのがわかった。もちろんその目に嬉々とした色はないだろう。
「さてと。アンダーソン・カイルくん。どうするつもりかしら。この子を協会に連れて帰って、彼らの現状を維持するための力とやらに手を貸す？そうすれば、もちろん君の地位も少なからず上がるだろうね。けれど、君が感じているようにノエルは既に一人の人間と相違ない」
天城とノエルの視線はずっとアンダーソンに向けられている。彼は何も言わずにただ床を

見ていた。どのくらいの間、彼は黙り込んでいただろうか。いい加減、天城もしびれを切らしてきた頃だった。突然、彼は顔を上げるとノエルを一瞥し、天城へと向き直った。

「少女を隠します。いえ、隠すというより……私は今回の協会の命には従えません」

「そう……けど、もっと具体的に述べてほしいわ」

「ひとつ。当てがあります。ここから西へ……あまり人が立ち入ることのない山の中腹にある邸宅です」

「人払いされた邸宅……なるほど、ジェームズ・カイルの家か。確かにそこなら……」

天城もはたとした顔でアンダーソンを見た。彼も頷き返す。

「はい、当面は大丈夫だと思います。彼は元協会の元老の一人。私の父でもあります」

***

「こんにちは」
俺は礼儀正しくきちんと挨拶をして、馴染みの扉を開けた。だが開けてすぐ、俺は玄関の前で立ち止まってしまった。何だか慌ただしげに魔女が廊下を行き来していたのだ。
「何してるんですか――ってここ、ノエルの部屋じゃないんですか？」
ほぼもぬけの殻となった一室ではノエルが黙々と出かける準備をしていた。
「どこか行くんですか」
「まあ、正解かな。けど、そうね、強いて言うなら避難準備かしら」
魔女は荷物片手にそう答えた。
「……戦争でも起きるのか」
「残念だけど、戦争ではない」
「じゃあ、何があったんですか？」
魔女が答える前に、ノエルは俺の前を通り過ぎて行った。その横顔はあまり愉快ではなさ

そうだ。少女の背中をじっと見ていると、いつのまにか魔女は窓際に立ち、空気の入れ替えをしていた。

「協会から特使が来た。あの子を連れて行くって」

「え？」

「そんな顔しないで大丈夫よ。まだ何も起きていない。ただ面倒事には巻き込まれるかもしれないけど。とにかく協会にノエルを引き渡すか否かの場面」

平然とした顔で説明する魔女。俺は混乱しきった頭でなんとか言葉を絞り出した。

「……それでどうするつもりなんだ」

「今回の協会の態度は呆れるほどご丁寧だったのよ。手紙にメールに特使。段階を踏んで私に迫って来た」

「どうするんだって言ってんだよ」

つい、俺は声を大きくして怒鳴ってしまった。魔女はおどけたような表情で俺を見下ろしている。しかし、次の瞬間その顔は凍てつくように冷たい表情をしていた。

「私の家族は私の財産のひとつだ。それを渡せと言っている様なもの。それを私が許すと思うか？」

俺は彼女の迫力に圧倒され、答える事が出来なかった。そんな俺をからかうように、魔女はすぐに元の表情へと戻った。

「ということで、ノエルは事が落ち着くまで別のところに避難する予定よ」

「協会から追手がきたらどうする？」

「そのためにあの子を遠ざけとくのよ。ここに戦力を集中させて相手を迎え撃つ。一番の本命は別の所で保管しといてね」

どうやら彼女の口ぶりからして、事態は既に進行しているようだ。俺はただ指示に従えばいいという事だろう。

「わかりました。俺は何をすればいいんですか？」

そう口に出した瞬間、俺は思った。どうやら久しぶりに非日常に巻き込まれてしまったなと。

＊＊＊＊＊＊

魔女は相変わらず考え事をしているのか、じっと窓の外を見つめている。俺の声がまるで届いていないのか。俺は同じ言葉を3回ほど繰り返していた。

「おい!!俺は何をすればいいんだよ!!」

怒気を強めて問いかけると、やっと彼女は俺の存在に気付いたようだった。

「ああ、忘れてたわ」

「おい……」

「まあまあ。えっと、隠れ場所まではアンダーソン・カイルが送ってくれる事になっているの。ほら、名前ぐらいなら聞いたことあるでしょ」

たしか以前に何回か、会話の中で出てきた事がある名前だ。

「だからそっち方面は問題なし。それと仮に協会が私に詰め寄っても、ロイヤルティーとしての生活費が減るだけ。そこらへんも私がなんとかすればいい。だから、君が何かする必要はない」

「え……」

じゃあ何のために――と思ったが、すぐに魔女は付け加えるように言葉を続けた。

「当初は君もボディガード的な感じでノエルと一緒に隠れ家に行く予定だった。けど、戦力を二人もそこに割くことはできない」

「二人？」

「君が行けばリニアもついていくだろう」

確かに強く否定することはできない。俺はどっちつかずな返事をした。

「ならば、もう君は関係してこない方が君にとって一番いいのではないかって思っている」

「けど、ここまで話を聞いておいて俺が無視できるとでも？」

口にした瞬間、俺もまずいと思った。こんな台詞、俺らしくないじゃないか。魔女も不思議そうに小首を傾げているが、口元だけはやけにニヤついている。

「……もしなんか起きたら、夢見が悪いだろ。一応、知ってるやつだし」

「ふむ。及第点ってとこかしら」

「何がだよ」

俺はじとりと魔女を見据える。すると彼女はどこか優しげな瞳を向けてきた。

「ing……全部知ったのね」

「ああ。まあ驚きはしたけど」

「……私が話してもよかったんだけど、君の周りが五月蠅くてね」

「いい奴らだよ」

「そうね」

ちらっと魔女が時計を見た。外ではノエルが大人しく待っているらしい。

「そういえば、俺にやることないとか言いながら何で呼んだんですか？」
「ああ、連絡してからやっぱいらないかなって」
いらないだと？俺は彼女の物言いに若干腹が立ったが、
「けど、まあノエルのお見送りに来るだけでもいいかなって思い直して」
そう言って彼女は俺を外へ追い返した。

＊＊＊

「よっ。さっきはよくも無視して通り過ぎたな」
玄関を開けると、リュックサックを背負った少女がひとり立っていた。彼女は俺につっけんどんな挨拶をすると、そっぽを向く。
「なんだよ、態度悪いな」

「別に。ちゃんと挨拶しましたけど」
久しぶりに会ったが、最初の印象と違いすぎだ。俺はがしりと彼女の頭を掴んだ。
「俺の記憶が正しいなら、お前は俺に泣きながら助けを請うてきた少女のはずなんだが？お前はそれと同一人物か？」
「いたい、いたい!離せ!」
「公園で大声あげて泣いてたよな、お前」
「あああ!!うるさい!!」
ノエルは必死で俺に抵抗する。そして俺の手を振り払うと、不満げな顔で見上げてきた。
「大体、私がお前に優しくする理由がない!!」
そういってノエルは俺の向こうずねを蹴った。場所が場所なだけに、少女の蹴りでもそれなりの痛みがある。一方のノエルは俺が跪いているのを置いて、すたすたと歩き出した。
俺はその小さな背中を追うように声を投げかける。

「いつ戻ってくるんだ」
「……知らない。私には何も決められない」
「じゃあ何で行くんだ」
俺の問いかけにノエルは一度だけ振り返った。
太陽に透けるほど綺麗な金髪が、彼女の顔にかかる。少女らしい声で彼女は静かに答えた。
「死にたくないから」
そう告げると、ノエルは真っすぐと俺に背を向けて歩いていく。俺は一人、玄関の前から動かず、ただじっとその背中を見ていた。そして誰に言うのでもなく、そっと呟く。
「ったく……かっこつけやがって」
それはため息にも似た程、無意識に出た言葉だった。

***

「日本支部に行ってくる」

教務室はまるで時が止まったかのように何一つ音がしていなかった。

やがて、魔女が口を開く。

「どういうつもりかしら、鈴木君」

「先手を打ってくる。まあ、もう既にむこうの部隊が動いてるかもしれないけど、少しは戦力を削ぐ事が出来るかと思って」

「なるほどね」

魔女はまるで関心がないかのように、止まっていた手を動かした。彼女の手はひたすら書類の整理に追われているようだ。

「とりあえず、私もサポートできる範囲のことはしてあげるわ」

「俺の武器を出してくれ」

魔女はすぐそばの戸棚を指さした。俺は彼女の示す通り、その戸棚を開けると奥の方に金属製の鞄が見えた。前回の戦いで使用したこともあり、埃はかぶっていなさそうだ。

俺は鞄の中から筆記用具をわしづかみにした。油性か水性か。俺は迷うことなく油性のペンを手にした。こちらの方が発動時間が長いのだ。更に俺は鞄のポケットから麻酔銃を取り出した。

「……あれ。先生、これ修理頼んでたはずなんだけど」

「あ。ごめん、忘れちった」

ぺろりと舌を出して謝る魔女。悪気を全く感じないのは、彼女が魔法でも用いているせいなのだろうか。俺は舌打ちひとつで彼女を許すと、別のものを用意することにした。クロスボウに短剣、馴染みの武器を身につけて俺は立ちあがる。

「先生、防弾服は？」

またもや彼女は無言で指さす。隣のキャビネットを開けると、当たり前の様に俺の防弾服が掛けられていた。俺は一度も手を止めることなくそれを着こなす。そのなめらかな動きに自分でも驚いていた。もしかしたら頭は追いついていなくても、俺の身体は既に非日常にどっぷりと浸かっているのではないかと。

「……初めてね」

ふと、魔女が俺に声をかけた。

「何が」

「自らその服を着て、自ら厄介事に首を出すのは」

「……まあ確かに、20代になっては初めてだな」

「何か心境の変化でもあった？」

「別に。俺は変わってない……俺はその時の考えで動いているだけだ。ただ今回は問題が問題なだけであって……ノエルは先生の家族だし、俺にとっても同僚……友人みたいなものだからな」

魔女は静かに息を零すと、一度だけ俺の顔を見上げた。

「奏のこと……よろしくお願いします。もうすぐ帰ってくるだろうし」

「ええ、こっちのことは万全にしておくわ」

魔女の言葉を聞くと、俺は彼女に背を向けて歩き出した。

「頑張ってね……鈴木聡太くん」

部屋を出る前、微かに小さな声が俺の背後に投げかけられたような気がする。

＊＊＊

青年が立ち去った後、机の上の書類を目で追いながら、天城はひとり考えていた。
「ingを教えたのは結果的に良かったのか」
教務室には彼女以外いない。漏らした言葉は宙へ霧散していく。
「今回は短期戦で終わるはずだ」
彼女自身、自分の口から出ている声に気づいてはいないのだろう。
「この件が解決したら、今度は――」

***

「ん？何だ、これは」
日本から遠く離れた地。都市の中心部からはほんの少し離れた場所にある住宅の一室で、男は訝しげな声を上げた。

彼――ケラーの手元には一通の手紙がある。宛先人のところには何も書かれていなかったが、どこか既視感のある文字に、彼は僅かな胸の高鳴りを覚えていた。大雑把に封を開け、中の手紙を取り出すと真っ先に便箋の一番下の部分に目がいった。

「エドモン……？」

彼が知っているエドモンは只一人しかいない。手紙の内容は様々だったが、いずれも何一つ近況を知る事が出来ていなかった彼にとっては有益な情報ばかりだ。

「なるほど……」

急進派が壊滅して以来、ひっそりと余生を送っていたケラーは久しぶりに遠出をすることにした。厚手のコートに腕を通し、数日分の仕度をする。

「あら、お出かけですか？」

きっちりと着こんだケラーを見て、彼の妻は面を食らった様子だった。だが、その顔色からは僅かに不安げな色が伺える。

「大丈夫だよ。ちょっとした用事だ、すぐに帰ってくるさ」

そう言ってケラーは自身の妻をあやすと外に出る。そして青々とした空を見上げた。

＊＊＊

昼下がり。

やかましい騒音を立てて、車は都内を走っていた。運転席にはアンダーソン・カイル。その後ろでノエルは、まるで人形のように何も言わずに、ただ外の景色を眺めていた。二人の間に会話は無い。荷台に積んだ荷物が揺れる度にかちゃりと立てる音以外、無機質なエンジン音のみが車内には響いていた。

「はあ……」

ノエルの口から小さくため息が漏れる。アンダーソンの耳には届かないほど小さな吐息だ。事実、彼女にも疲れがたまっていた。etcの文書の一件以来、彼女の生活は平凡そのものだった。幼稚園の仕事は強引にさせられていたが、研究所の仕事とは全然違っていた。そして、ノエル自身、全く楽しくないわけでもなかった。それなりに普通の生活をしていた中

の突然の脅威。彼女の心は深く沈んでいる。

「気が進まねえな……」

まるでノエルの心中を言い当てたかのような発言が運転席から聞こえた。どうやら、彼の独り言らしい。しかし、思わず彼女はそれに反応してしまった。

「何で気が進まないの」

突然帰って来た声にアンダーソンも僅かに驚いたようだった。彼は一瞬の間を開けて答える。

「お嬢ちゃんにはあまり理解できないかもしれないが、俺はいま全てを諦めているところなんだ」

そう、アンダーソンは自身の行動が立派な命令違反だとわかっていた。反逆したと思われても仕方がない。任務放棄のみならず、件の研究所の人間を匿おうとしている。おそらく今回の件がひと段落したところで、協会に彼の席はないだろう。しかし、そのリスクを負っても、彼の人間性は今回の任務を受け入れることはできなかった。

そして彼自身も気づいていた。これは協会が自身を追放するための策なのだろうと。前政

権時から最も魔女と情報共有をできる立場の人間であり、親魔女派の筆頭とも言うべき人物を組織的に追放するにはどうすればいいのか。おそらく協会もアンダーソンが離反するというこの状況を、幾らか予想していたに違いない。

「命令に従っても殺され、従わずとも殺される。それなら自分の思った通りに行動する方がまだマシだ。自分を殺して、魔女の手にも殺される。二度も死ぬのはごめんだからな」

アンダーソンは奥歯をきつく噛みしめた。

「ああ……周たちに会いてえな」

ふと、心細くなった彼は、かつて共に戦った友人の顔を思い出していた。今すぐにでも彼らに自身の状況を相談したくてたまらない。しかし、彼は日本にまで来たと言うのに、未だ金色の魔女とこの少女以外とは顔を合わせていなかったのだ。

「ねえ、この車あなたのもの？」

アンダーソンが零すひとりごとにノエルも何か話す気になったのか、彼女はずっと前を向いている運転手に声をかけた。

「車か？ああ、協会からの支援だ。一応俺は出張中のエリート外国人みたいなものだから

な」

「……どうしてそんなエリートの人が私を保護するの？」

ノエルなりの皮肉だろう、アンダーソンはぴくりと眉間にしわを寄せたがすぐにそれを解いた。

「君の運が良かったとしか言えないね。もしも君が男だったり正体不明のロボットであったなら、俺は迷わず協会に送っていたに違いない」

「なにそれ……あ、私それ知ってるわ。ロリコンってやつ？」

「ちっげえよ!!」

アンダーソンは思わずアクセルを踏み込んでしまった。目の前は赤信号だ。慌てて彼はブレーキを踏む。車内が大きく揺れた。

後部座席にも彼の焦りが伝わったようだ。ノエルも今の衝撃に目をパチクリとさせている。だが、口元からは僅かに笑みが漏れていた。

「ねえ、どこに向かってるの。私、何も知らないんだけど」

「どこって言われてもな……町のはずれって言えばいいのか？そこのナビ見たらよくわかるぞ。まあでも、ここまできたらあと1時間くらいだろ」

ノエルは前の座席の間から顔を出す。ナビと言われた機械をじっと見るが、いまいち理解し難かった。

「そこってどんな所？広いの？」

「広さは充分だな」

「パスタは出る？私パスタ好きなの」

「それはそこに住むじいさんに言ってくれ」

運転に集中するためか、適当に会話を流すアンダーソンの態度にノエルは頬を膨らませた。そしてひょいっと顔を引っ込めると、再び外の景色に目を向ける。

「ねえ、私は生き残れるかな」

「……さあな」

＊＊＊

「ふう……」

一仕事を終えて、魔女は席を立った。机の端には数枚の紙束が置かれている。これは幼稚園のものとは関係ないものだ。アンダーソン・カイルがこれ見よがしに置いていったものだろう。彼女は仕方ないといった様子でそれに目を通すことにした。

「……呆れた」

そこに書いてあったのは今回の協会側の意向についてだ。協会は魔女が従わない場合はロイヤリティーを白紙に戻すとしていた。妥当な判断だ。一般社会を生きて行く上で最も重要な資金源を経つ。確かに彼女にとってもそれは相当な痛手だった。居候含め4人を養っていくには、幼稚園からの収入では賄いきれない。

「あらら、随分とご丁寧に調べていらっしゃること」

書類は全て手書きだった。おそらくアンダーソン自身が書いたものだろう。魔女は一通り書類に目を通していた。しかし3枚目をめくった瞬間、彼女の表情が一変する。彼女はぞんざいにその書類を机の上に放置すると、真剣な顔つきで口元に手をやった。

夕暮れの教務室。時計の針の音だけが響いている。

***

下から突き上がってくる風と轟音を耳にしながら、俺は財布を取り出した。協会本部までの移動手段は地下鉄を使っていくしかない。ICカードをチャージした俺は、続けて切符を購入すると後ろで待っているリニアへ差し出した。

協会本部はこの都市の中心部にある。ここからだと幾つもの駅で乗り換えをしなくてはならないので、かなり面倒だ。だが、行くしかない。

俺が改札を抜けると、リニアも黙って俺の後をついてくる。幼稚園を出てから俺たちは一度も会話をしていなかった。別に喧嘩をしたわけでもない、ただ互いに何も口にしなかっただけである。

そんなわけだから、俺は電車を待っている間、じっと線路を眺めているしかなかった。きっとこの線路の上でも死んだ奴がいるのだろう。自ら戦いに赴こうというせいもあってか、俺の脳内に暗い思考が流れてきた。しかしそれは列車の到着によって、一瞬で白昼夢のように霧散した。

揃って列車に乗り込む。やがて通常通りのスピードになった頃、唐突にリニアが口を開いた。

「……不幸だと思ったことないの？」

脈絡もなく投げかけられた言葉に、俺は一瞬聞き間違いかと自身の耳を疑った。だがしかし、彼女の当惑した表情からして、今のは紛れもなく彼女の口から、それも思わず口をつ

いて出た言葉なのだろう。

「……急になんだよ」

「いや、えっと……だから、その……3年前の事件から嫌々巻き込まれて、友人も失くして、心に重たいものを背負って……たくさんの大切なものを失ってきたのに……全部自分の能力が原因だなんて言われたら、私だったら立ち直ることはできないと思うから……ごめん、今のは無意識で出た言葉だった」

俺はリニアに何も返すことはなかった。ただ地下鉄の音が鼓膜に響くばかり。気づくと、電車は隣の駅に到着したようだ。俺たちの目の前の席が空き、俺はリニアに席を譲る。

「え、いいよ。聡太の方が荷物多いでしょ」

「いいから座れ。これくらいの気づかいはできる」

するとリニアは照れ笑いを浮かべながら、俺の目の前に座った。列車は次の駅を目指して動き出す。俺の目の前にリニアが座る事により、自然と俺たちの視線は絡み合う事になる。一瞬の静寂の後、再びリニアが声をかけてきた。その瞳は俺からの答えを待っているようである。

「……聡太、さっきの話なんだけど」

「……不幸かと言われれば不幸だ。けど、人間生きてたらそういう風に思う事はいくらでもあるだろ……確かに、俺は3年前の事件以降、不幸になった。それは間違いない。けど、後悔はしていない、というかしたくない。あの時の俺が自分で選択したように、他の奴らもそれが正しいと思って選択した結果なんだ……だから、変な気づかいはいらない。それに社会的にみれば、俺はちゃんとメシが食えてるし、家もあるし、学校にも行けてる。だから総合的には普通ってやつじゃないか？」

「……そっか、そうだよね」

そういうと彼女は、どこか安心したような頬笑みを浮かべて俺から視線を逸らした。

その後、目的の駅に着くまで俺たちは何も話さなかった。

＊＊＊

床から天井までびっしりと並べられた本棚、深いワイン色をした豪華な絨毯。おそらく人里はなれた屋敷なのだろう。外からの喧騒はなく、音という音と言えば小鳥のさえずりと――老人が対面しているモニターだけだ。

『随分と久しぶりだな、えっと……お名前は？』

「戯れに付き合うほど暇ではない。用件だけを述べて頂きたい」

モニター上の男とは反対に、ぶっきらぼうとした老人は笑顔ひとつ浮かべることなく、じっと男を見据えていた。男の方もそんな老人の態度には慣れているのか、臆する事なく言葉を続けた。

『そちらも聞き及んでいるとは思うが、息子さんが我々の命令に対し、単独行動を行っているようだ』

「それで？」

『息子さんの件を放免にする代わりに、協会の方に戻って来てもらいたい。前政権と現政権との間に確執が生まれてきていてね、前政権内でも支持の高い君に橋渡しのような役目をしてもらいたいんだ』

「俺の様な老いぼれの橋なんざ、すぐに崩落するぞ」
眉ひとつ動かさずに告げる老人に、なおも男は好意的な笑みを浮かべた。
『ははっ、素敵なジョークだ。けど、あなたほどの人物ならまだ大丈夫』
「目的は何だ」
『全ては現状を維持するため』
その言葉に、やっと老人の顔に表情が現れた。
「アルゼンチン……俺の記憶が正しければ、君は選挙に当選した後、前政権時の要職連中を形式上、しかも末端の席に数人だけを残して全て一掃したと思うんだが？」
皮肉の籠った笑みで老人はアルゼンチンと呼んだ男を見据えた。
『……当時は色々と事情があったんだ。今はもう関係ない話だ。それと、そのアルゼンチンという呼び方は辞めて頂こう。私はいまや協会長という地位にいる』
「そうか、だが俺はずっと変わらないだろうよ、アルゼンチン」

男の口からはいつのまにか笑みは消えていた。そして、彼は眉根を寄せて今一度、老人へと迫る。

『ひとまず利害関係を整理しよう。私は前政権と現政権の調和、つまりあなたの復帰だ。そしてあなたは、息子さんの件を水に流し処分を撤回される』

そういうと、男は隣にいる秘書と思しき男に視線を送った。その人物の手には奇妙なスイッチが握られている。そして、男の指示と共に今、それが押された。

老人は静寂が落ちたモニターをじっと見据えているが、何も変化は起きない。だが、やがて画面は男から外のカメラへと変わった。フランス・パリ本部。それは紛れもなく彼が長年勤めていた職場だ。しかし、今そこに映されている映像には一カ所、黒々とした煙をたなびかせ、無残にも中身がえぐられたような場所があった。

瞬間、老人の瞳にも驚きの色が浮かんだ。それと同時にカメラは切り替わり、先ほどの男の姿が画面いっぱいに再び映った。

『お察しの通り、息子さんの職場だ。さて、ジェームズ。君はどうする？』

「……野郎」

老人は唸るような声を零した。

『ジェームズ、そんな態度をしないでくれ。それじゃあ、まるで我々が悪人みたいじゃないか。悪いのは研究所の連中だろ』

老人は何も返さない。男はやれやれといった様子で背もたれに深く沈みこんだ。

『まあ、いい。明日にでも答えをくれ。健闘を祈るよ、ジェームズ』

そういうと、プツンっと映像は途切れた。しばらくの間、真っ黒な画面を見続けていた老人だったが、やがて外から聞こえてきたエンジン音を耳にすると、さっと椅子から立ち上がった。

「……やれやれ、また息子のやつが厄介事を持ち帰って来たか」

***

屋敷から数メートル離れた丘のような所で車は止まった。中から2人の人物が出てくる。一方はぶっきらぼうな顔で、一方はどこか緊張している様子だ。

アンダーソンを先頭に、ノエルは後ろ手に鞄を引きながらその後をついていく。屋敷は見えているが、ここから先の道は車で行くことはできないので2人は徒歩でそこに向かった。

門の前に立つと、アンダーソンでさえ僅かな緊張を覚える。それほど目の前の屋敷は豪華と言わざるを得ないほどの建物だった。

アンダーソンは一息つくと、呼び鈴を鳴らした。豪華な建物に不釣り合いな簡素な音が響く。返答はない。

アンダーソンは再び呼び鈴を鳴らした。じっと自身の指先を眺めているが、なおも帰ってくる声はない。

「親父!!いるのはわかってるんです、ドアを開けてください!!」

いよいよアンダーソンは掛金を上下に激しく振って来訪を知らせる。しかし室内からは、この家は無人だとでも主張しているかのように物音ひとつ聞こえなかった。

このやり取りをずっと後ろで眺めていたノエルはふと、アンダーソンの隣に立つと、彼が

何かを言う前にその小さな足をドアに向けて繰り出した。先ほどよりも激しい音が響く。しかもノエルは相手の返答を待つことなく、次々とその強固な扉を蹴り続けた。

やがて、扉の中から物音が聞こえてきた。ぎいっと音を立てて、老人が顔を出す。老人は不愉快そうな顔で彼女を見下ろした。対する彼女も不愉快そうな顔で老人を見上げている。

「やかましいぞ」

「……扉があかないから」

彼は少女から顔を上げ、息子の方を見据えた。

「私の書斎からここまで来るのに、どれだけ時間がかかると思っているんだ。耳も聞こえづらくなっている。そもそも来訪の連絡すらなかっただろう」

「それは」

「ふーん、年寄りで耳も遠くて、足も遅い。なら何で一人で暮らしているの？」

アンダーソンが答える直前、再び少女が口を挟んだ。老人は先ほどよりも更に眉間にしわを寄せて、息子に視線を送った。

「私の勝手だろう。それよりこいつは誰だ」
「話すと長くなります。親父、まずは中に入りましょう」
老人は何も言わずに、アンダーソンを上から下までじっくりと眺めた。そして、彼はふいっと家の中へと戻っていく。後ろがついてきているのかも構わず、彼は居間を目指して一直線に進んでいった。まるで背中で、ついてこいとでも言っているようである。

***

地下鉄から出ると、俺は今日がいい天気だったということを思い出した。雲ひとつない、青。何の混じり気もない、きれいな空色だった。
しかし、何故か俺の顔は晴れない。もちろんこれから大変な事が起きると言うのもあるだが、
「……そろそろ新学期か」

それに伴う学費の工面。どうしようか。

「聡太？」

俺がぼんやりと空を見上げていると、いつのまにかリニアは随分と前の方にいた。

「まずはこっちを片づけてからだな」

東京のど真ん中。雲の上まで伸びていそうだと思うほどの超高層ビル群。協会も表向きの顔は堂々と立派な大企業だ。どこかで必ずは耳にした事のある企業看板の数々、それらのビルに負けず劣らずの高さのビルの前で俺たちは立ち止まった。

「リニア、お前社員カード持ってるよな？」

「ん？ああ、持ってるよ」

そう言って彼女は財布からカードを取り出した。一応、身分証明書のひとつでもあるはずなのに、そこに映っていたのはまるでカードを見た人間を小馬鹿にでもしたような顔だった。

「……こんなんでよく通ったな」

呆れ半分のため息をついて、俺はカードをリニアに返した。
「とにかく、これがある以上俺たちが内部に入るのは簡単なはずだ。おそらく大企業の体裁を取ってるだろうから、中には一般人の社員もいるはず。その人たちはなるべく傷つけないようにしよう」
「それで？」
問い返すリニア。おそらく作戦の具体的内容を知りたいのだろう。しかし、俺の頭に浮かんでいたのはきっと突拍子もない事に違いない。
「聡太？」
「……とりあえず重要人物が上にいるのは違いない。それも協会専用の階がある はずだ。だから、その……秘密通路みたいなものを」
「なるほど」
リニアは俺が思っていた以上にあっさりと頷き返してくれた。そして人差し指をぴんっと上にあげる。

「とりあえず中に入って探してみよう」
そういってリニアはまるで外回りを終えた社員のような堂々とした足取りで入口へとむかった。俺も慌ててその後を追うが、やはり気後れしてしまう。そもそも服装からしておかしい。外見だけでもスーツを着込んでくれば良かったのかもしれない。
「ほらほら、聡太。びびってないで!!」
「だ、誰がびびって……!!」

ビルに入ると、そこは大企業の名にふさわしいフロントだった。高級感のあるタイルが床じゅうに敷き詰められ、どの壁を見てもきらきらと輝いてる。
「これが会社か……」
以前にインターンでいくつかの会社を回ったが、それとはまったく規模が違う。張り詰めた空気、いや、お金の空気とでもいうようなものがそこには漂っていた。
「さてと、行きますか」

リニアの声に俺は、はっと現実に戻る。彼女はこのような空気をものともせず、意気揚々と社員カードを警備員に見せた。俺は彼女の連れという設定だ。

一度だけちらりと警備員が見ただけで、俺はすんなりと内部に入る事ができた。リニアは既にエレベーターの方へと向かっている。俺も慌ててその背中を追った。

エレベーターの中で二人きりになると、やっと俺は一息つくことができた。

「……お前は気楽そうだな」

「まあ気は楽だね」

彼女は俺の気も知らずに、あっさりと答える。

「だって私は聡太が手伝ってって言うからついてきたんだもん。だからそれほど気負いもないし。大体が今回の件は本当に「他人事」だからね。聡太が言わなかったら私も動かないつもりだったから」

冷徹とも取れるが実際はそういうものなのだろう。俺も特に彼女の発言を気に留めること

はなかった。すると彼女は、付け加えるように口を開く。
「もちろん、これが正しい行動だと思ってるから私も動いているんだからね。それに何か冒険の予感がして」
リニアは目を輝かせていた。
どうやら本当に気負いはないらしい。

＊＊＊

建物の一室。通常よりも多くの窓があるせいか、あるいは周囲の建物同様に高層の位置にあるせいか、照明をつけなくても部屋の中はとても明るかった。
部屋の奥には縦に長い丸テーブルが横たわっており、典型的な会社の会議室に相違ない。
しかし、今そこには一人の男が窓の外を眺めて立ち尽くしているばかり。口角は僅かに上がっていた。

「食事はもう終えたのですか？」
突然、男の背後で扉が開き秘書と思しき男がはいってきた。対する男は、特に驚きを示すことなく淡々とした口調で返す。
「ああ、そういえばまだ食べていなかったな」
「忙しいとは思いますが、何かお食べになってください」
「そういう君も今朝から何も食べていないだろう」
男は試すような視線で秘書の男を見返した。すると、図星だったのか彼は気まずそうに男から視線を逸らした。
「私は平気です。合間に何か食べるつもりですから」
「そうか。それより現在の状況は」
「予想通りです。アンダーソン・カイルは父親の所に向かいました。改造人間もおそらく一緒だと思われます。我々の手の届かない安全な場所は、魔女の家かそこしかないと考えたのでしょう」

秘書の男はまるで資料を読み上げているかのように淡々と述べていたが、微かに間を空けると、

「金色の魔女からは何も返答は得られておりません」

ふと、静かに報告を聞いていた男の顔色が変わった。

「こちらも予想通りだな。自身は動くことなく様子を見る……か。あの女狐め」

「ジェームズ・カイルの方はどうなのでしょうか」

忌々しげに唇を噛む彼に、傍に控える男が問いかけた。すると彼は、先ほどよりも僅かに上ずった調子でそれに答える。

「ジェームズ・カイルが我々に協力する可能性は殆どない。だが、息子が関わってると知った今なら或いは。いずれにしろ我々が取る行動は既に準備されている」

「……そうですね」

「他に何かあるか」

男が促すと、寸分の間もなく部下は答えた。
「リニア・イベリンが鈴木聡太と共に動き出しました」
「ほう」
「金色の魔女が何かしら絡んでいるかと思われます。行く先はおそらく協会日本支部です」
報告を聞き届けた男は、何も言わずにゆっくりと机の上に手をおいた。何か考えがあるのか、部下は何も反応がない上司に恐る恐る訊ねた。
「……日本支部に応援は送られるのですか？」
「はっ……そんなはずないだろう。他にも人手が足りないところはいっぱいあるんだ。今回は後片づけ程度の人員で充分だ。我々の目的はジェームズ・カイルの方にあるんだからな」
そう言って男は椅子の背もたれに身を預けた。しかし、しばらくして思い出したように口を開いたかと思うと、
「そういえば、日本支部には奴がいたな」

「奴？」

「フーゴ・ベル。彼がリニア・イベリンと遭遇する可能性もなくはないか。おい、支部の監視カメラはちゃんと作動しているんだろうな」

「はい」

部下は返事をすると、また別の用件があるのか。再び違う話題へと移っていった。会議は依然として続くようである。

＊＊＊

その家はとても大きな廊下を持っていた。大人5人が横一列に立っても窮屈さひとつ感じないほどだ。そのためアンダーソンら3人が、並んで歩いてもいいのだが何故か彼らは、老人を先頭に各々その背中を追うばかりである。更に後ろ二人はきょろきょろと周囲を見回しており、緊張を抱いているのは明らかだった。ノエルはもちろん、息子であるアンダーソンもこの屋敷に訪れるのは初めてであった。

ふと、老人の足が止まる。まだ目的の部屋にはついていないと言うのに、彼は後ろを振り返った。そして何も言わずに息子の顔を見つめる。それはどこか複雑そうな顔だった。普段から、細長く、ややつり上がった目つきをしている彼の顔は、見る人を緊張させるが、今はそこに何かしらの感情を乗せているため余計に変な勘ぐりをさせてしまうのである。

「……親父」

「大人しくしていると思っていたらこれか」

老人の苦言にアンダーソンは顔を伏せる。そんな彼に、老人は少しの情けもかけることはなかった。

「間抜けな奴め」

そう吐き捨てると、老人は懐から何かを取り出した。それは一瞬で人の命を刈り取る事ができる代物であり、凶器であり、

「それは……」

アンダーソンの背後で息を飲む声が聞こえた。

老人が手にしていたのは、以前ノエルが使用していた拳銃だった。

＊＊＊

協会は通常、一般の企業として偽装しているが、中身も徹底していた。そこで働く人物は一般の人間と、協会に通じている人間の両方。しかし彼らは部署できっちりと分けられており、会話を交わす事もない。だが、例外としてアンダーソンのように両方の部署に配属されている人物もいる。

「……だから私にこういう仕事が回って来たんですね」

日本支部課長の柳公平はうんざりとした顔を隠すことなく、目の前のモニターを見上げた。そこに映っているのは一人の男。態度からして、柳よりも幾分上の立場にいるようだ。

『後始末は頼んだぞ』

「後始末ね……この年にもなって」

柳はため息と共に、傍に置いてあった灰皿に煙草を預けた。そしてネクタイを緩めると先ほど以上に気だるそうな態度を露わにする。しばらくの間、気が進まない、気が進まないとぼやいてた彼だが、画面上の男が何も反応を示さないと、諦めたのだろうか彼は再び煙草に手を伸ばした。

のろのろと上がる煙が、送風機の風に流されて目の前を横切っていく。その緩やかなスピードがどこか自身と似ていて、思わず彼は口元に笑みを浮かべた。

「……それでブリーゲルさん。今回の事件で最も汚い仕事を私に押しつけてくるなんて、もしかして私あなたに嫌われてます？」

『そういった感情はない』

淡々と答えるハンス。柳はやれやれといった様子で天井を見上げた。普段はこの部屋で協会関連の内容を話すことはない。本当に一般企業として会談するための部屋だ。いわば、この部屋は柳にとって現実的空間のはずだった。それが突然入った一本の電話によってこうも崩される。

元々、柳は協会の人間が好きではない。更に言えば、母国で働く事を選んだのも、気難しい協会本部で働くのは気が滅入ると思ったからだ。もちろん母国にいるからと言って、簡

単な事務的な仕事ばかり回ってくるわけではなかったが。

『仕度はどのくらいでできる』

「どのくらいって……緊急の要請じゃないんですか？すぐに準備して、向かいますよ。こっちもそんなに人は割けないんで15人ほどで」

『充分だ』

ハンスの返答を聞くと、柳は立ちあがった。何本も続けて煙草を吸っていたせいか、軽く眩暈を覚える頭を振りながら、彼は晴れ渡った空を見上げる。そして途方に暮れたような様子で呟いた。

「アンダーソン・カイル……何でこんな面倒臭い事、起こしちゃうかね」

『それよりもジェームズ・カイルとどのような話し合いがされているのかが気になる』

先ほどの短い返答ではなく、ハンスが会話に入って来てくれた事に、柳はやっと誰かと話している様な気分になった。

「ジェームズ・カイルか。都落ちした年寄りが今更何するっていうんですか……というか、

ブリーゲルさん、知り合いじゃありませんでしたっけ？」
そう言いながら柳は、ジェームズの顔を浮かべた。それは３、４年ほど前の記憶。政権が変わると言う節目の時にちらりと目にしたことがある程度だ。
『知り合いだが、今回の仕事には関係ない』
公私は弁えてると……柳は心中で皮肉を言いながら、再び煙草へと手をかけた。
『協会の命令を反故したアンダーソン・カイルはブツを手にして、自身の父親の住まいに逃走したと聞いている』
「けどアンダーソン・カイルも馬鹿じゃない。私は何か事情があると思いますけど、ブリーゲルさんはどうお考えです？」
『さあな』
硬く口を結ぶブリーゲル。せっかくの会話ムードがあっという間に事務報告に化してしまったことに、柳も顔をしかめた。
「いやいや、ブリーゲルさん。こっちも後始末は頼んだって言われても……詳しい事が分

からない限り動けませんよ」
『全てを知りたいか、柳』
ハンスは一瞬の間もなく、柳の意志を肯定した。何の障害も、壁もないその返答の早さに、逆に柳の方が怯んでしまった。
「いいですよ……中間管理職の私には、このくらいの情報量がぴったりですから。とにかく、私はその後始末ってのをすればいいんですよね？」
『ああ、君に全て任せる』
柳はやれやれといった顔でモニターの方へと向き直った。
「はいはい。分かりました、分かりましたよ。どうせここで私が引き受けなかったら、身の安全は保障されないってね。ああ、誤解しないでください、私は何一つ不満を持ち合わせちゃいないですよ」
ブリーゲルは黙って男の顔を見ていた。やがて、柳の顔は今日初めてと言っていいほど真剣なものへと変わる。

「ブリーゲルさん、私は自分が不利だと思ったら簡単なとこに逃げるんですよ、死ぬのは御免なんで」

そう言って柳はブリーゲルとの回線を切った。そして企業側へ外出の連絡をすると、部屋を後にした。

柳は廊下を歩きながら、自身の身の上を考えていた。金銭的な蓄えはそれなりにある。退職をしたとしても、今より生活は苦しくなるが妻たちが食べていけない事はないだろう。しかし、全てが穏やかにいくわけではない。

「これも私の運命か……」

柳は心を決めると、一気に顔を引き締めた。今回の様な任務は初めてではない。ただ家庭を持ってからはしばらく回ってくることはなかった。それ故、彼は困惑しているのだ。

「そういうのにはおあつらえ向きの人員がいるだろうに……何で俺に……」

そうぼやきながら、柳は足を進めるのであった。

***

数年前の話だ。突然、父親が実家ごと外国に引っ越しをした。

アンダーソンの記憶に残っている事実はそれだけだった。事前の相談もなく、政権が変わるや否や、彼の父親は忽然と長年住み慣れた家を手放したのだ。

英国に住んでいた当時は数多くの使用人が住みこみで働いており、おまけに多くの学者や協会の人間が出入りをしていたため、家の中は常に人であふれていた。

しかし、今アンダーソンが歩いている家は以前のそれとは全く違う。すれ違う人は誰もいない。廊下に飾られていた写真や勲章もない。唯一、以前と似通って感じられるのは建物内に漂う古風な雰囲気だけだ。

しばらくすると、3人は目的の応接室についた。老人は自身でストーブに火をつける。照明が備え付けられているにも関わらず、どうやらストーブの明かりで充分の様だ。

アンダーソンは周囲の様子を見回しながら、殆ど無意識にポケットに手をあてた。そしてその妙な重さに違和感を覚えた彼は、はっと思いだした。ポケットからゆっくりと手を出

してみる。
そこに握られていたのは、アンダーソンの手の中では随分と小さく見える拳銃だった。
「ほら」
そういって、アンダーソンはノエルへと拳銃を返した。彼女はまさかそれが自身の手元に帰ってくるとは思っておらず、しばらく呆気にとられた様子で彼の手を眺めていたが、やがてその拳銃を手にした。するとアンダーソンの手には余っていたそれは、彼女の手元の中でぴったりとその存在を主張し始めた。ノエルは何事もなかったかのような顔でそれを鞄にしまうと、再び室内をぐるりと見回し、
「ねえ、どこに座っていいの？」
「どこでもいい」
老人はぶっきらぼうに答えるが、その目はノエルの傍にあるソファを指していた。何の断りもなく彼女がそれに座り、老人も一人用のソファに座る。そしてアンダーソンも老人の向かいに座ると、さっそく彼は話を切り出した。
「現在の状況は？協会はもう動き出しましたか？」

「ああ、お前のせいで俺の所にも連絡がきた。今回の件でお前の地位もだいぶ揺らぐな」
「ええ、おかげさまで。大変な事になってます」
「ほう。随分と落ち着いているな」
そういうと、彼らは揃って視線を床に落とした。互いにあまり良い顔ではない。早く打開策、対抗策を考えねばならなかった。
「……全く策も無しに行動しおって」
「小言ですか？」
「ああ、そうだ。お前は一体何を」
「そうですよ。間違えたんですよ、選択を。けど、これは正しい事をしていると思ってます」
アンダーソンは有無を言わせないといった瞳で、老人を見据えた。しかし、彼にも親としての威厳がある。老人も真っすぐとアンダーソンを見返した。

「正しいということが賢明ということではない。私はお前の親だ。私はお前が何かする度にその隣に立って意見を言い続ける」

「親父……俺だってもう30超えてるんですから、いい加減……」

アンダーソンが疲れたように額に手を当てる。老人はその様子を見て、ふんっとしたように顔をそむけた。ノエルはというと、目の前で交わされる親子の会話に何も関心を示すことなく、自身の手に戻って来た拳銃を見つめていた。

「そういえば、あの拳銃はどこで？」

ふと、アンダーソンが顔を上げると、老人は明らかに不機嫌な様子でノエルの手元に視線を送った。

「昨日、速達で届いたんだ。何故か私の方で着払いになっていた。送り主は例の幼稚園から、『全部直しておいた』という手紙と共にな。どうやらお前の顔を見る限り、我々は金色の魔女の掌の上で踊らされていたというわけか」

その言葉にアンダーソンは先ほどの幼稚園での会話を思い出し、どっと疲れを覚えた。要は既にこういう結果になると魔女は踏んでいたのだ。アンダーソンはひとまず体を休める

ために、紅茶を飲むことにした。しかし、目の前の老人に頼む事も出来ず、使用人もいない。仕方なく、彼は自身で席を立つことにした。

「ここ、キッチンはどこにあるんですか」

「キッチン？何をする」

「喉が渇いたんですよ」

「キッチンはむこうだ」

老人の大雑把な物言いにアンダーソンは、ぶつぶつとぼやいた後キッチンへと向かった。おそらく彼の言いようでは、応接間からそんなに離れた位置ではないのだろう。

アンダーソンの予想通り、キッチンは応接間から2、3奥の部屋にあった。一人暮らしの老人らしく、食器棚には両手で数えきれるほどの僅かな食器類しかない。アンダーソンは種類の異なるカップを3つ手に取り紅茶を注ぐと、その大きな体つきには似合わないほどゆっくりとした動きで、お茶を運んだ。

***

「一応、ここまでの経緯を説明します」

3人は暖かい紅茶を口に含みながら、応接室で話を続けていた。

「協会から改造人間を連れてこいという命令を受けました。御存じの通り、数年前に政権が代わって以来、協会内でも何かしら変化が起きているように思われて」

「変化とは？」

老人は紅茶を手にしたまま、視線だけをアンダーソンへと向けた。

「それは……我々、協会の目標は現状を維持することです。しかし、今の協会はそれと相反した方針を取っているというか……正直、3年前の事件も協会内の政治的権限を強化するためだったとしか思えません。

「それは違う」

「ですが、派遣された人員も殆どベテランの人間ばかり。こちらの被害は最小限に済みました」

「アンダーソン」

突然、老人は彼の名前を呼んだ。そして諌めるように口を開く。

「あれは戦争だ。現状維持という言葉を盾に我々は我々の地位を守ろうとした。真実がどうであろうと、それが現実だ」

その言葉にアンダーソンは何も言い返す事が出来ずに俯いた。対する、老人は先ほどからずっと自分たちの会話を眺めている少女に目を移した。

「それで、お前は協会からの命令に背いてこの少女を連れてきたと？」

「……はい。俺がその子を連れ帰ったとして、協会が何を行うかは想像できるんで」

老人は再び紅茶を口に含むと、じっと眼を閉じた。

「私の記憶が正しかったなら、お前は私が協会を出て行く時に私から勘当を食らったはずだが？もう二度と顔を合わせる予定はないのではなかったか？」

「……緊急の事態だったんで」
「虫の言い奴め」
アンダーソンはなおも顔をあげることはない。老人はそんな息子に一瞥をくれると、ノエルの方へと向き直った。
「おい、小娘。お前さんからは何も言う事はないのか」
ノエルは何も言わずに老人を見つめ返した。その様子に彼は情けないと言った様子で首を横に振る。
「違う。それなりの考えはした」
「ほう」
「死にたくなかっただけ」
あまりにも単純な答えだった。下手に勿体ぶる息子とは正反対なその物言いに、思わず老人は目を細めた。

「ここで匿うとしてもそう長くはもたないぞ。既に協会は動き始めている」
「知ってる」
じっと2人は互いを見据えた。いや、老人は彼女の瞳に動揺が走ると思っていたのだ。しかし、既にノエルは最悪の場合の結末を受け入れているのか、そこに恐怖の色は映っていなかった。
「当初は、私も政権が変わるとは思っていなかった。選挙というのは通例化された一種の形式みたいなものだったからな。だが、南米の奴らは政権を奪おうと各大陸の人間を見事に抱きこんでいた」
唐突に老人は昔語りを始めた。思わずアンダーソンも顔を上げて、父親の方を見る。
「もちろん欧州支部は当惑した。数百年と保たれていた地位が一瞬にして消え去ったんだからな。呆れる程に。幸い、私には財産も権力もあったから、部下たちの面倒を見ることはできたが」
「親父……」
「アンダーソン、協会は前政権と現政権の融和が狙いだ」

老人の眼はその年齢には見合わないほど鋭く光っていた。
「協会は先ほどある案を提示してきた。お前を助ける代わりに、私に協会へ戻れと」
アンダーソンはじわりと冷や汗が流れるのを感じた。それは簡単に言ってしまえば、自身に対する最終通告だ。彼は震える声で老人へと問いかけた。
「仮に……仮にここで親父が協会の要求を無視した場合は……」
「私もお前も危険だな」
アンダーソンは目を見開いたまま、再び視線を床に落とした。しかし、老人はそんな息子の様子を視界の隅にやり、ノエルの方を見据えた。
「小娘、死にたくないと言ったな」
ノエルは力強く頷く。そんな少女の様子に満足いったのか、老人は適当に寛いでいいと言葉を残すと、二階へと姿を消した。

＊＊＊

3、4階ほど上に登った頃だったろうか。俺はいくら上がっても変わらぬフロア、忙しなく動く社員にそろそろ痺れを切らしていた。

「そういえば、リニア。秘密通路の目星は付いているのか」

「全然」

あっけらかんと答えるリニアに、俺も自然と顔が強張る。とりあえず上に行けばいいと進んできたが、もしかしたら既に秘密通路への道を通り過ぎている可能性があるからだ。

「どうするんだよ、俺はてっきりお前が何でも知っていそうな雰囲気で前に進むから……」

「あ、じゃあ先生に聞いてみる？」

自身が責められると分かった瞬間、リニアは恩師の名前を出した。だが、確かにそれは妙案に違いなかったのだ。

「……確かに、先生なら知っていそうな気が」
俺の返事が早いか遅いか、あっという間にリニアは携帯電話を手にしていた。そして数回のコール音が聞こえたかと思うと、俺の耳にも微かに魔女の声が聞こえてきたのであった。

***

「……そう、そこを行けば秘密通路に行けるわ」
そう言って魔女は受話器を置いた。リニアと鈴木からの電話だった。早く教えてほしかったと愚痴を言われたが、何も聞かずに向かった鈴木たちも悪いだろう。そう思いながら、魔女は再び作業に戻った。
机の上にあるのは先日のテロ事件の書類だ。
「ロベルトは死亡と思われる。ベルコルは……おそらく行方不明か、或いは死亡か」

魔女は男の部分だけ流して、下の項目へと目をやった。

ケラーは逃走、エドモンとゴトーは海外逃避及び行方不明。フーゴは協会側が捕えたと書かれていたが、その後ろには赤文字で協力という二文字が追加されていた。

「……急進派の人間が協会と協力した？」

研究所、それも急進派に属する人間からしたら協会の印象は最悪のはずだ。それが、処刑をまぬがれて、協力するというのはおかしな話である。魔女は眉を潜めて、書類を見直した。

フーゴが最後に戦った人物はリニア・イベリンだ。リニア・イベリン……学問化された魔法を学ぶ事ができない例外的な人物の一人、協会内でも彼女の態度からして、目につくのは無理からぬことであり、その特異な体質は協会の研究対象の一つでもある。魔女は更に思考を巡らせた。

最近起きた事件。確かに、鈴木が狙われた事件もいくつかあるが、ハンス・ブリーゲルの帰国や今回のテロは彼とは関係がないのではないか。etcの文書とingの覚醒は別物ではないか。

「これは……ちょっと、面倒臭い事が起きそうね」
前回のテロでフーゴはリニアに接近した。そして、フーゴは現在日本支部で協力という形にいる。そして、その日本支部には鈴木とリニアが向かっている。
嫌な予感が走った直後、玄関で音がした。奏が帰って来たのだ。
「ただいま」
「あ、あら。奏ちゃん、おかえりなさい」
「みんなは？」
「ちょっと出かけてるわ」
奏はじっと魔女を見据えた。
「ほんとに？」
「本当よ、すぐに帰ってくるわ」
そう言いながら、魔女は机の上の書類をかたづけていた。